

大発見は足もとに

1 おばけ池の少年

「みどりが丘団地のおばけ池には、夜な夜なおばけが出るらしい」
そんなうわさが学校に広まったのは、六月に入ってからだった。

「おばけ池におばけが出るのは当たり前だろ、おばけ池にライオンが出たらおどろけ」と、先生は冗談まじりにいったが、僕たちは見たこともないおばけの話題で盛り上がった。

誰かがいった。

「何でもさ、おばけの正体は小学生の男子らしいぜ。おばけ池のほとりに一人でぼつんと立っていてさ、そのままふっと消えてしまうというんだ」

「だってあそこは、立ち入り禁止だろ。フェンスがあつて、入れないじゃん」

「どっちも、おばけにや、関係ないことだ」

「そうか、でも、タクミ、くわしいんだな」

「ああ、隣のおじさんから聞いたんだ」

おばけが出るのは子どもが歩かない夜中のこと。目撃者は、たいてい仕事帰りの大人だった。おばけを見たという人は数人いるらしいが、大人はこうした話を面白がることはなく、子どもが大げさに、より面白い話にして、うわさを広めているのだった。

「そうだ。今度、夜中にみんなでおばけ探しにいかないか？」

「えー、やだよ」

「こわいのか、いくじなし」

「違うよ。塾はあるし、スイミングはあるし、そんなにひまじゃあないってこと」

「ま、みんな忙しいからな」

何だかんだといいながら、みんなはおばけの話で盛り上がっていた。しかし、僕は、冷めていた。

はつきりいって、おばけなどこの世にいるはずがない。それに、おばけ池は僕の家目の前にあるのだ。毎日、勉強部屋から見ている池にそんなものがあるはずがないことは、僕が一番知っている。

それ以前に、僕は、おばけの正体にうすうす気がついていてるのだ。

（ユウヤに違いない。ユウヤの家はおばけ池のすぐ近くだし、あいつは大人しくせに、フェンスを乗り越えることなど、平気な男だ）

幼なじみだから、僕には分かるのだ。

みんなが気づかないのは、ユウヤが四月から不登校になったからだと思う。みんなは、教室に来なくなってしまうユウヤのことを、すっかり忘れてしまったようだった。

「おばけの写真とか撮ったら、テレビ局が来るかなあ」

「こわくて撮りにいけないくせに」

僕は、ノリの悪いやつと思われないう程度にタクミたちの話に相づちを打ち、適当に話を聞いていた。

七月の蒸し暑い夜だった。晩ごはんを食べながらお母さんがいった。

「ヒロキ、おばけのうわさ知ってる？ いやよねえ、家の前で変なうわさが立って」
僕は大人ぶって答えた。

「うわさなんてのは、すぐに消えるよ」
するとお父さんが、興味津々の顔で近づいてきた。

「何、何、何？ おばけが出るって？」

「つまらないうわさだよ」

「何だよお、つまらないなんていうなよお」

子どものような声を出す父に、僕は、きっぱりといった。

「つまらないからつまらないの。おばけなんているわけがないだろ」

「まあまあ、そうやって、決めつけるなよ」

「まさか、いるか思ってる？」

「うん。だって、面白いじゃん、おばけが出るなんて。ヒロキは見てみたいと思わないのか？」

「……」

僕は、父のこういうところがきらいだった。こうした話を小さな子どものように面白がらないと、すぐにつまらないという顔をする。そんな顔をされたら、まるで僕自身が面白くない人間だといわれているようにじゃないか。僕はもう六年生、来年は中学生なのだ。いつまでも小さな子どもみたいなことはいつ

ていられない。

「なあ、父さん」

「何だ？」

「おばけ池って、昔からあるのか？」

「ああ、あるよ。子どもころは、よく遊んだな」

「何して？」

「そりゃ、魚捕りさ。メダカやドジョウ、フナやモロコもいたなあ。あの池からは、細い小川が流れていて、もっぱらそちの川で遊んだなあ」

「メダカとか、まだいるかな？」

「うーん、もういないだろうなあ。ヒロキはどう思う？」

「絶滅危惧種だっていうし、いるわけないっしょ」

「難しいこと知ってるな」

「常識！」

「そうだ。それよりさ、俺が子どもころやったスイカやトマトの盗み方を教えてやろうか。いいか、もいそのまま持っていくと見つかるから、いったん小川に流すんだよ。で、知らん顔して下流で待つと、プカプカ流れてくるんだ。そいつを拾って食うわけだ。こうすれば見つかっても、盗んだんじゃない、拾ったんだって、いいわけできるだろ。どう、ためになるだろ」

「役に立たない話」

「役に立てるかどうかは、お前次第だ」

「お父さん！」

くだらない父の話は、目をつり上げた母の一言でと絶えた。僕は夫婦げんかのまき添えを食うのはいやなので、そのまま二階にある自分の部屋へと向かった。

部屋に入るとまず、窓からおばけ池を見下ろした。おばけ池は団地の坂を下りきったところにあつた。池と坂道との間には草や木が生い茂り、その周りを金網のフェンスが取り囲んでいる。高学年なら乗り越えることができる高さだが、乗り越えて草むらに入るもの好きな子どもなど、どこにもいなかった。池の対岸は斜面が急なスロープで、二十メートルもある斜面はコンクリートで固められていた。階段もあるにはあるのだが、やはり、ガードレールと高いフェンスで囲まれているので、誰も池に近寄ることなどできなかった。

（ほら、おばけなんかいない）

僕は池を確かめると、マンガの本を手にベッドに横になった。僕にはマンガを読むかゲームをする以外、楽しみはなかった。壁にかけてあるルアーロッドも、友だちとのつきあいで買っただけで、特別、釣りが好きというわけではなかった。

一時間もしただろうか。階段の下からお母さんの声がした。

「ヒロキ、もう九時だから、早くお風呂に入りなさい」

「はい」と、僕は立ち上がった。しかし、窓から見えるおばけ池を見て、体が固まった。

池のほとりに、おばけが立っていたからだ。何人もの大人が目撃したという少年に間違いない。少年は白いシャツを着て、身じろぎもせずす暗い藪を見上げていた。

（ユウヤだ！）

僕は、懐中電灯を手にとると、こっそりと玄関を抜けだした。

おぼろな月が空にとどまり、団地全体をぼんやり照らしていた。僕は、足音を立てずに長い坂を駆け下りた。街灯に照らされアスファルトが白く光っていた。その分、僕の影は地上にはつきりと映り、街灯を過ぎるたび、伸びたり縮んだりを、何度も繰り返した。坂を下りきると、僕は何食わぬ顔で自動販売機の前に立った。もちろん、人に怪しまれないためだ。白いワゴン車が目の前を横ぎっていった。

（よし、今だ）

僕は、すばやくフェンスを乗り越えると、静かに着地をした。そして、背丈ほどもある草をかき分け、木の陰からおばけをのぞいた。

（やっばり…）

おばけの正体は、予想通りユウヤだった。

ユウヤと僕とは、ずっと仲良しだった。遊ばなくなつたのは、四年生のころ。みんなが、塾やサッカーで忙しくなり始めたころからだ。同級生のほとんどがひまな時間はゲームで過ごすという中で、ユ

ウヤだけが浮いていた。ウウヤはゲームもしないのだ。せめて、話ぐらい合わせればいいものを、ウウヤはそれもしなかった。

要するに、空気が読めないのだ。

だから、いつも一人ぼっちで校庭の片隅かたすみにいることになる。そんなウウヤが、春から学校に来なくなつた。先生は、当たり前のように「ちよつとした不登校だから」といった。しかし、みんなの態度たいどは冷たかつた。

「いてもいなくても変わらないよね」

「要するに、ずる休みでしょ」

僕ぼくも、そんな彼かれらと同じく、ウウヤに関わることはしなかった。

そんなウウヤがここにいた。僕は（学校にも来ないやつが、夜のため池で遊んでいていいのか）というところを、問い詰めてやろうと思つていた。

ウウヤは小さな懐中電灯かいちゆうとうで藪やぶを照らしながら、僕の方へ近づいてきた。隠れようと思つたが、これ以上身を隠す場所はない。

（やばい！）

とっさに逃げにだそうとする僕に、ウウヤがいった。

「だめ、動かないで！」

「……」

「その木を見て……」

ウウヤの視線しぜんを追うと、僕が手をかけていた木にでっかいスズメバチがとまっていた。刺さされるかもしれないと、僕の頭はパニックになった。しかし、足がすくんで一歩も動けない。

「いいから、いいから。そのままゆつくりと、こつちへ来て」

「……」

「そう、ゆつくりとだよ」

僕は、さびついたロボットののような動きで、スズメバチのいる藪だっしめつから脱出だつしめつした。ウウヤが、スズメバチをのぞきこみながらいった。

「ハチはさ、巣を守るとき以外、むやみに攻撃こうげきなどしてこないんだよ。だからおどろかさなければ、大丈夫じやうぶ」

「本当か？」

ウウヤは、僕に見つかったことなど気にもせず、食い入るようにスズメバチをながめていた。

「へー、キイロスズメバチだ。よく見ると、ハチってかっこいいよね。機能きのう美うつていうのかなあ、すごいデザインだ」

「意味不明だし」

「どこかに巣があるんだろうなあ。そうそう、スズメバチはさあ、巣もマール模様もようでキレイなんだ」
「かっこいいとかキレイとか、お前まへ絶対ぜつたいおかしだよ。だってこいつは超危険ちやうきけん生物せいぶつだぜ。テレビでもやっ

てるだろ、最近、スズメバチが住宅地に侵入してきたって」

「あはははっ、それは違うよ。人間がスズメバチのすみかに侵入してんの」

何だか調子がくるった。ユウヤはご機嫌でよくしゃべる。僕に見つかった後ろめたさとかないのか？ 押されぎみの僕は、形勢を逆転しようと、こういった。

「ところでお前、こんな場所で何してんだよ。ここは立ち入り禁止だし、子どもの出歩く時間じゃないだろ」

「へへへっ」

「何がおかしい？」

「それは、ヒロキも同じだろ。そんなことより、そこ見てよ」

ユウヤはそういうと、再びスズメバチのいた木を指差した。

「あつ、ノコギリクワガタ」

僕の胸は高鳴った。クワガタもカブトムシも、ペットショップで買うものだと思っていたからだ。低学年のころ、虫採りに出かけたことはあるが、実際につかまえたことは一度もない。

「採ってごらんよ」

「いいのか？」

「うん」

僕は緊張する指先で、ノコギリクワガタをつまんだ。

「かっこいいでしょ」

「まあ…」

平静を装ったが、指先が震えていた。感動すると本当に手足というものは震えるのだ。

「これは柳の木なんだけどさ、樹液が出ているからいろいろいるよ。団地のど真ん中だし、フェンスで囲まれているから誰も知らないみたい。せっかくだから、もっと、探そう」

そして僕はユウヤを問い詰めることも忘れて、クワガタ探しに夢中になった。おばけ池の脇にある藪には、数本の木が並んでいた。僕はその一つ一つを懐中電灯で照らし、クワガタを探した。樹液の出ている場所では、数匹のカナブンが蜜を吸っていた。

「茶色ののと、緑色のがいるんだな。こっちは蛾か？」

「それは地味だけど、蝶だよ。ヒカゲチョウ」

「えー、これで蝶なのか？ 地味だぜ」

「止まるとき、翅を閉じるのがチョウ。翅を開いて止まるのがガ」

「へー、そうなの」

「ま、大体だけだね」

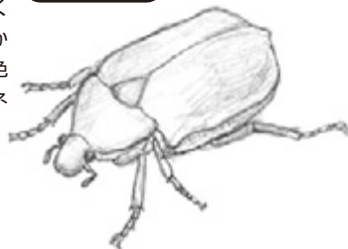
「おおっ、カブトムシだ。マジすげー」

樹液に虫が集まる様子など、テレビでしか見たことがなかった。

(すごい、夜って、こんなに虫がいるんだ…)

日本では本州以南から屋久島にかけて生息
すると考えられている。コガネムシとよく
似ているが、コガネムシが金属的な鮮やか
な緑色であるのに対し、カナブンは赤茶色
をおびた色である場合が多い。体もコガネ
ムシより大きいことが多い。

カナブン



ヒカゲチョウ

本州と四国と九州の一部に生息
する日本固有種の蝶で、色は地
味。花の蜜よりも樹液や果実を
好むため、樹液についていると
ころを見つけることが多い。



タニシ

日本には4種のタニシが知られている。
全国の小川や用水路等の淡水に広く生
息するが、環境の悪化により個体数の
減少が心配されている種 (マルタニシ)
もある。殻は全ての種で右巻きで、そ
の特徴がタニシ以外の巻貝との区別に
用いられることもある。



キロスズメバチ

ハチの中で最も攻撃的な
のがスズメバチの仲間。都
市部の家屋にも巣を作るた
め、もし巣を見つけても絶
対に近寄らないように。



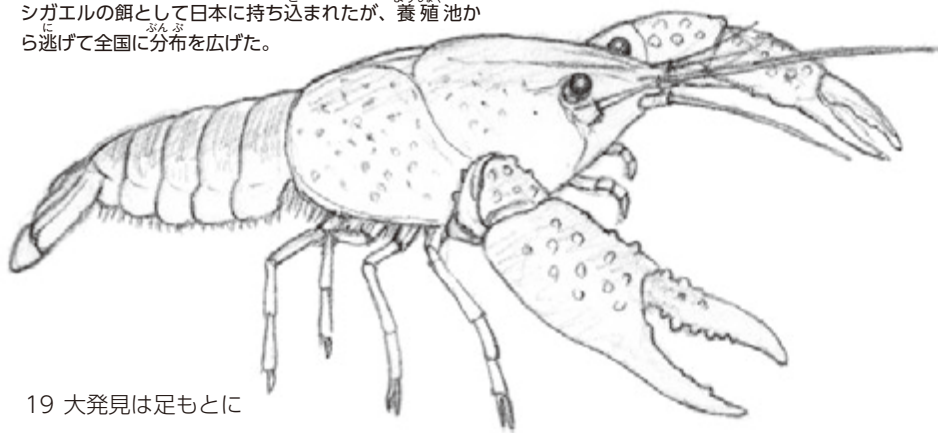
メダカ

田んぼや小川、池や沼などの淡水域に広く生息す
る。群れて生活する姿が「メダカの学校」として
歌われ親しまれてきたが、今は絶滅危惧種。



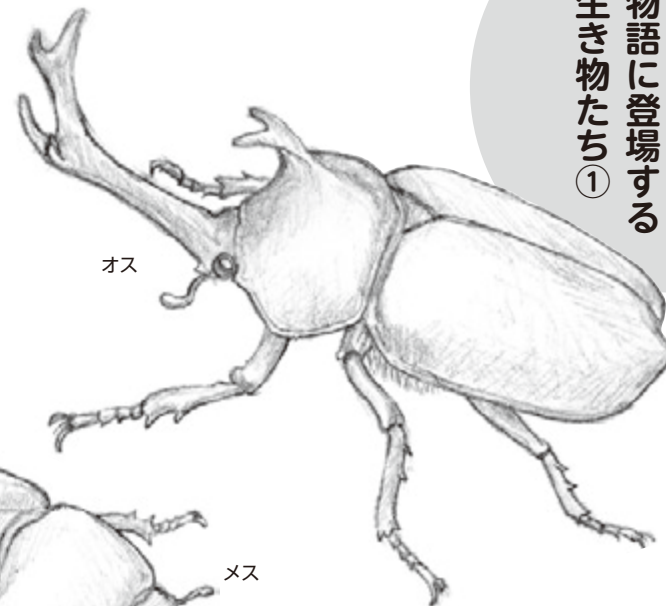
アメリカザリガニ

その名の通りアメリカ南部が原産。1927年に食用のウ
シガエルの餌として日本に持ち込まれたが、養殖池か
ら逃げて全国に分布を広げた。



カブトムシ

日本の甲虫で最も大きく、
本州から南の雑木林など
に生息する。ただし、北海
道では、人が放したものが
繁殖したと考えられている
場所もある。主に夜、クヌ
ギなどの樹液が染み出る
場所に、クワガタやスズメ
バチなどととも集まる。



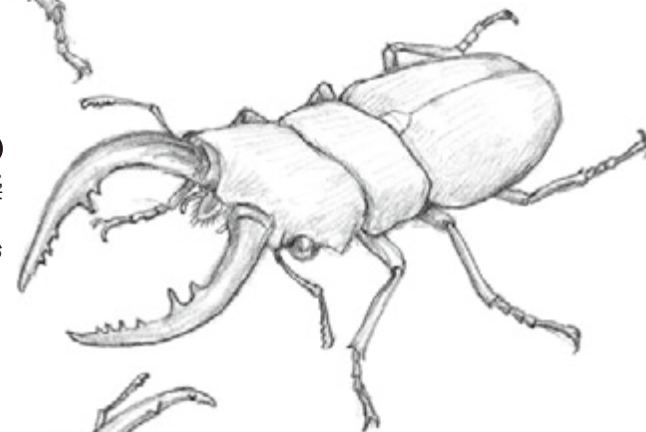
オス



メス

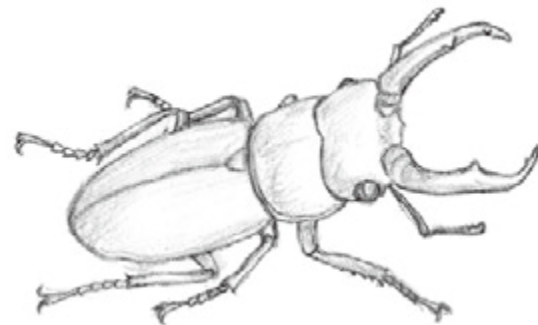
ノコギリクワガタ

大きな顎にノコギリのような突
起が多数あることからノコギリ
クワガタと呼ばれる。赤みをお
びた体と湾曲した顎が特徴。



コクワガタ

日本のクワガタムシの中で最
もふつうに見られ、森林だけ
でなく町の街路樹や公園の樹
木でも見つけることがある。



僕は興奮した。ユウヤを問い詰めにきたのに、そのことも忘れ、二人で虫を探した。結局、その後、見つけたのはコクワガタ一匹だったが、ノコギリクワガタにカブトムシ、初めての体験に僕の胸は高鳴った。

おぼけ池の脇に僕たちは座り、真つ暗な池をながめていた。フェンスの向こうから、街灯や家の明かりが僕たちを取り囲んでいる。何だか、このおぼけ池だけが、別の世界のように思えた。

「あれ、ヒロキの部屋でしょ」

「うん。お前の部屋はあれだろ」

低学年のころは、一緒に遊んでいた仲だった。

「考えてみれば、池をはさんだ隣同士だね」

そんな風に考えたことはなかった。僕はこのタイミングで、ユウヤにいろいろ聞こうと思った。

「なあ、ここへはよく来るのか？」

「うん、ときどきね」

「でも、何で夜なんだよ。虫が多いからか？」

「ううん。それはさ…、礼儀かな。学校へ行かず、昼間からうろろしてたら、見つけた大人が困るだろ。ヒロキだって、自分が学校に行つてるとき、僕が外で遊んでたら、いい気持ちがないだろ。不登校にも礼儀はあるんだ」

真顔でいうので、笑えた。

「さっきのスズメバチだって、黄色と黒のストライプだっただろ。あれは注意色。工事現場のトラ柵と一緒にだよ。俺は毒針をもっているからこわいぞ、近寄るなって、教えてくれているんだ。そうやって考えるとハチは、礼儀正しい親切な虫だろ」

なるほどなあと思った。

確かに、ユウヤは小さなころから礼儀正しく親切な男だった。ユウヤが学校で一人ぼっちだったのも、空気を読んでみんなに合わせないだけで、何ひとつ悪いことをしたわけじゃない。

「虫、好きなんだな」

「もともと、そんなに好きだったわけじゃないよ。ただ、夜の散歩でここへ来るようになってからかな。いろんな生き物を見つけると、何だか知りたくなるじゃん。そいつのこと」

「いろんな生き物って、虫だろ？」

「虫だけじゃないよ。ここには鳥が来るだろ、それからイタチとかハクビシンとか。カエルにイモリに…、池の中にもいろいろいる」

「えー、この池、生き物いるの？」

「アミを入れたことはないから、よく知らないけど」

「魚は？」

「メダカはいるよ。あとは…、よく分からない」

「うそ、メダカがいるのか？」

僕は立ち上がり、懐中電灯で暗い水面を照らしてみた。すると、水面を泳ぐ小さな魚がおどろいて、草陰に隠れるのが見えた。

「ほら、今のメダカだよ」

「マジかよ…」

ついさつき、父と絶滅危惧種だからいないと話をしたばかりのメダカが、何匹もいた。水面にはアメンボウがつんつんと浮かび、その下をけし粒のような甲虫が横ぎった。

「あっ…」

ユウヤが叫んだ。

「何だ？」

「ほら、そこ。石の上で目が光ってる」

僕はユウヤに寄り添うように、懐中電灯が照らす水中をのぞきこんだ。するとそこには、オレンジ色に光る目玉が二つあった。

「ザリガニか？」

「違う、エビだよエビ。本で見たことはあったけど、実物は初めてだ。て、いうか、こんなところにいるなんて」

ユウヤの声を聞きながら、僕も同じことを思っていた。

(僕たちが、知らなかっただけなのだ)

「ねえ、ヒロキ。しきり直そうよ。アミを持って、また明日、ここに来よう」

ユウヤは、満面の笑みで、そういった。

僕は返事をしなかったが、心は大きく揺れていた。そして僕たちは、このことは誰にも話さないと約束し、別々の道で、お互いの家に帰った。

2 君はどうしたい？

給食の後、みんなはいつものように教室の隅に固まり、たあいもない話をしていった。僕は、それとなく話の輪に加わった。するとみんなが僕の顔をのぞきこんでいった。

「すごいぞ、ヒロキ、最新情報だ。例のおぼけ池の件なだけどき、正体が分かったんだ」

僕の胸は、ドクンツと音を立てた。

(まさか、こんなに早くユウヤのことがばれるとは…、ひょっとして、昨日、二人でいるところを誰かに見られたのか?)

みんなの視線がこわかった。

「あれはさ、池に落ちて死んだ子どもの霊らしい。団地ができるずっと前に、魚捕りをしていてあの池

に落ちた子がいるんだってさ」

ほっとした。どうやら、僕たちのことは、ばれてはいないようだ。「えっ、あの池って、団地ができる前からあったのか？」

「ああ、昔はこのへん、山と畑ばかりだったらしいからな。農業用のため池っていうやつ、分かるだろ？ その名残さ」

「でもさ、魚捕りって、魚なんているのかよ」

「昔はいたらしいぜ。フナとかメダカとか」

「今は？」

「いるわけねーし。団地の池だけ、フェンスがあつて入ることもできねーし」

「だよなー」

何だか悔しかった。みんなに、ノコギリクワガタがいたことも、カブトムシがいたことも、メダカがいたことも、エビがいたことも、全部教えてやりたかった。でも、それはユウヤとの約束だからできない。僕は何もいわず、秘密の味をかみしめながら、自分の席へと戻った。

その日は、夕飯の後すぐに風呂に入り、コンビニに行くといつて家を出た。アミとバケツは、あらかじめ車庫に用意しておいたので、それを持って坂を下った。フェンスを乗り越え、ユウヤが木の前で待っていた。

「待ってたよ」

「えっ、昨日は来るとはいわなかったぜ」

「でも、来ると思ってた」

何だか、見透かされたみたいで悔しかった。しかし、昨日の時点で、ここに来ることを僕は決めていた。「いいから、早く捕ろうぜ。あんまり遅くなれないし」

僕は、そうごまかして池に向かった。

まずは柳の木の近くから。この辺は浅く、水辺に草が生えていた。ユウヤは手をいっぱい伸ばし、遠くから手前に引くようにアミを動かした。見たことないやり方だ。

「アミって、すくい上げるもんじゃね？」

「手前からすくおうとすると、魚は向こうに逃げちゃうから、これが正解だよ。池の底を感じながら、ゆっくり引き寄せるんだ」

ザバンツ。

ユウヤが、引き寄せたアミを引き上げた。

「あっ、すごい」

「どう、何が捕れた？」

アミの中には、数匹の小魚と、よく分からない虫が入っていた。

「やった。これ、メダカだよ。これは、フナの赤ちゃんかな。あとは、ヤゴが二種類。ギンヤンマとサナエトンボかな？」

僕には名前など分からないが、とりあえず自分でつかまえてみたかった。ユウヤを真似て、アミを遠くにザブッとやった。

アミに伝わる水の抵抗。少しずつ引き寄せると、池の底に石があることや、泥があることが感じられた。そして、アミを返すと、そこには真つ赤な獲物がいた。

「おっ、アメリカザリガニだ」

「やったね、ヒロキ」

それから僕たちは、夢中でアミを動かし続けた。何度も何度も、アミを入れては引き寄せる。獲物がいなければ、すぐに飽きるのだろうが、いくらでも獲物が捕れるからやめられない。

「魚捕りつて、意外と簡単なんだな」

「この池が、すごいんだよ」

僕たちはそういつて笑った。他にも分かったことがある。この池が思ったよりも、深くないということだ。特に柳のある東側は浅く、土のスロープになっていた。ここには草が生え、小魚や虫が多かった。それ以外の岸はコンクリートで固められ、いきなり深くなっていったが、それでも水深は五十センチほどで、立ってない深さではなかった。ここにも魚がたくさんいたが、アミを入れると、さっと逃げてしまうので、ほとんど捕ることはできなかった。一番の発見は、池の周りが古い石組みでできていたことだ。小さなころから見えてきた池なのに、フェンスの外からは気がつかなかった。

「分かった。これは、昔のため池の石組みだ。おそらく団地ができたとき、ため池の周りをコンクリートで覆ったんだな。だから、きつと、この池の魚は、ずっと昔からすんでいるやつらなんだよ」

ユウヤが興奮気味にいった言葉は、正解だと思った。そしてもう一つの発見は、この池に出口があったということだ。池の西側には、けっこう広いトンネルがあった。トンネルの入り口には幅一メートルほどの堰があり、雨で増水したときにあふれた水がトンネル内の水路に流れでるといしくみになっている。水路の脇は、歩けるようになっていたが、真つ暗なので入る気にはなれなかった。

「ユウヤ、こんなトンネル、知ってた？」

「僕の家からは、見えるからね。道路からは見えないと思う」

「でもさ、不思議じゃね？ 雨も降ってないのに、けっこうな水が流れてるぜ」

僕の質問に、ユウヤは迷わず答えた。

「たぶん、湧き水だと思う。あの斜面から染みでた水が池に入るんだよ。それが証拠に、あそここのコンクリート、ぬれているだろう」

確かに、池の北側のコンクリートはいつもぬれ、コケがいっぱい生えていた。それにしてもユウヤは、何でこんなことが分かるんだろう。

「お前、何でも分かっちゃうんだな」

「想像だよ。正解かどうかは分からないけどね。でも、この水量は多すぎる。もしかして、ため池の中にも湧き水があるのかもしれない」

何だか、ユウヤと出会ってからはおどろきっぱなしだ。今まで見えていなかったものが、見えるようになったり、使ったことのない脳味噌でいろいろ考えているような気がする。

それから僕たちは、バケツの生き物を比べあった。

メダカ、フナ、モツゴ、ヨシノボリ、ドジョウ、ヤゴ、ザリガニ、エビ、オタマジャクシ。名前は、全部ユウヤが教えてくれた。

「ユウヤ、この獲物、どうする？」

「僕は、少しだけ持って帰ろうかな」

「えっ、水槽とかあるの？」

「うん。ヒロキは？」

「オレは無理。こんなの持って帰ったら、母さんに叱られちゃうよ。『夜なのに、どこ行ってたのー!』ってね。あつ、そろそろ時間だ。帰らなきゃ」

ユウヤが持って帰る魚を選んでいる間、僕はもう少し魚を捕ることにした。足もとの石垣を懐中電灯で照らし、水中をのぞきながら歩いた。石にはヨシノボリがぺたりとついていて、こいつはお腹のヒレが吸盤になっているんだと、さつき、ユウヤに聞いたところだ。ヨシノボリは、つんつんと泳いでは石の壁に止まった。その脇にエビがいた。エビは光を当てると、まぶしそうに後ずさった。光がきらいなんだろうか。しつこく照らすと、石垣のすきまに入りこみ、出てこなくなった。アミでつかまえないでも、こうした生き物の動きを見ているだけで、飽きることはなかった。

しばらく行くと、柳の手前の浅瀬でタニシを見つけた。黒くて大きな殻を背負い、カタツムリのように、のつたりと水の底を歩いている。池の底にはタニシの歩いた跡が、道のように残っていた。

(よし、つかまえてやろう)

ぬれた石に足を置き、懐中電灯で照らしながら、アミを伸ばしたときだった。水中を大きな影が横ぎった。

「うわあ！」

おどろいた僕は、足をすべらし、そのまま浅瀬にしりもちをついた。

ジャバーン。

「あわわわっ」

必死で池からはいだした僕のところへ、ユウヤが血相を変えて駆け寄ってきた。

「どうした、大丈夫か」

「へび、へび、へびがいた！」

「へび？」

「池の中に…、真つ黒で、こんなでかいやつ」

僕は動揺していた。この目で水中を泳ぐ巨大な生き物を見たのだ。腕ほどの太さがある、黒くて、とても長い影。

「水中？へびは水に浮くはずだけど…」

「見たんだよ、本当に」

「信じる、信じるよ。でも、何なんだろうなあ」

ユウヤが信じるといってくれたので、僕は落ち着きを取りもどした。しかし、冷静になったとたん、大問題に気がついた。全身ずぶぬれ、ズボンは泥だらけ。この格好で家に帰ったら、『何してたの、どこに行ってたの』という、母さんの質問攻撃を避けることはできない。

「どうしよう…」

困り果てた僕に、ユウヤがいった。

「大丈夫、とりあえず僕の家においでよ。作戦がある」

僕たちは、おばけ池の北の斜面にあるコンクリートの階段を登って、ユウヤの家に向かった。

広い玄関で僕が待っていると、ユウヤがお母さんを連れて二階から降りてきた。ユウヤのお母さんは、黒のタンクトップに細身のジーンズ姿。長い癖毛を後ろで束ねている様子は、僕の母とはあまりに違い、まるで、ロックミュージシャンのようだなと思った。

「あらま、すごいことになっちゃったんだねえ」

ユウヤのお母さんは、笑いながらそういった。

「すみません、こんな夜遅くに」

「いいの、いいの。余計な心配はいらないから。それよりもだ、ユウヤから事情は聞いたんだけど、君

はどうしたい？」

「…」

すぐに返事ができなかった。

「服は洗えるけど、すぐには乾かないし」

ユウヤがいった。

「乾燥機に入れたら？」

「それでも、一時間はかかるわよ。それに君たちの心配は服なの？ それより夜遊びをうちの人にばれるのが困るでしょ。洗いたての服を着て帰ったら、それはそれで怪しまれるわよ」

「分かっちゃうかなあ？」

「親をなめないでよ。ズボンについた泥や、草の種で、君たちがどこで遊んできたのか、何をしてきたのかなんで、全部お見通しよ」

（どうしよう…）

困り果てた僕に、ユウヤのお母さんはいった。

「よし、今日はうちに泊まっちゃいな。そうすれば、全部解決。証拠隠滅もできるしね」

「えっ、いいんですか」

「遠慮はいらないよ。君が困らなければ、問題なし。ユウヤも、それでいいでしょ」

「ああ」

「じゃ、電話すつか。ヒロキの母さんなら知ってるし。私が話をしてあげるから、君もちゃんとお母さんに頼むんだよ。分かった？」

「はいっ！」

礼儀正しく返事をする僕を見て、ユウヤはニヤニヤと笑った。

結局、僕はユウヤの家に泊まることになった。ユウヤのお母さんは、さつきとは別人のようなていねいな口調で僕の母と挨拶をかわし、コンビニで話しこんだら盛り上がりつつあったとウソをついて、この話をみごとにまとめ上げた。

僕はユウヤのスウェットに着替え、リビングで冷たい麦茶を飲んでいた。

「すごいでしょ、うちの母さん」

「うん、圧倒された」

「ちゃんと裏と表のある人間になりなさいってのが、口癖なんだ」

「何だそれ。普通は、裏のない人間になりなさいだろ」

「普通じゃないんだよ、あの人は。裏だけ、表だけじゃ、人間は幸せになれないんだってさ。裏も表も大事にしなさいが口癖。変だろ」

変だとは思う。しかし、何か納得できる。

「ううん、何かかっこいいよ」

本当にそう思った。さつき、あの状況の中で、ユウヤのお母さんは、僕にまず『君はどうしたい？』

と聞いたのだ。自分の母さんだったら、ああしなさい、こうしなさいというだけで、あんな風にたずねることはしない。

「ふーん、そんなもんかなあ」

しばらくすると、ユウヤのお母さんが、洗面所から帰ってきた。

「よしよし、あとは洗濯機が全部やってくれるよ」

「ありがとうございます」

僕がお礼をいうと、ユウヤのお母さんは食器棚の引き出しから、タバコを取り出して火をつけた。

「いいの、いいの。うちはこの子と二人つきりだから遠慮しないで。」

それにね、こっちが感謝してるんだから。この子、いっちゃまえに不登校とか決めこんでんじやない。人間ぎらいになったんじゃないかって、心配してたのよ」

ユウヤがいった。

「何、そのいい方。六年生にもなったんだから、学校へ行くか行かないかは自分で決めろっていったの、母さんじゃん」

「いったけどさ、本当に行かないとは思わないじゃない。あははっ、ねえ、この子、変わってるでしょ」

「……」

返事に困った。変わっているとは思っていたが、お母さんの方が変わっている。

「ほら、ヒロキが困っているだろ」

「はいはい。まあ、夜中に連れてくる友だちがいるんだから安心ね。ほっとしたわ。母さんは二階で仕事してくるから、あんまり夜ふかしするんじゃないよ」

ユウヤのお母さんはそういうと、軽い足取りで階段を上がっていった。

「こんな時間まで仕事？」

「こんな時間から仕事さ。雑誌のライターなんだよ。だから、仕事中に話しかけないのが昔から僕の親孝行。さ、僕の部屋に行こうか」

部屋に入るとユウヤは、池から持ってきた小魚を水槽に放した。何でもこの水槽は、以前、金魚を飼っていたときのもので、今日の昼間、新しい水を入れ、ろ過器もセットしたらしい。

水槽に入れられた魚たちは、しばらく右往左往していたが、やがて落ち着きを取りもどし、メダカはメダカ、フナはフナというように、小さな群れを作った。

「へー、メダカの目玉って、白目の上の方が青いんだ」

「モツゴって、口が上を向いてるぜ。変なの」

バケツでは、よく見えなかった魚の顔が、はつきりと見えた。

「おっ、ドジョウが砂に潜った」

「見て見て、砂から目玉だけ出してる」

僕たちは、この小さな水族館を飽きることなくながめ、小さな魚のかわいい動きに歓喜の声を上げた。しばらくすると、ユウヤは何かを思いだしたように本棚に向かい、分厚い図鑑を持って机に向かった。

「魚類図鑑？」

「うん、ちょっと、気になることがあってね」

それからユウヤは黙りこみ、本を読み続けた。しかたがないので、僕は床に横になり、水槽を見上げながらぼんやりと考えた。

つかまえた魚のこと、おぼけ池のトンネルのこと、湧き水のこと、そして、目の前を横ぎった大きな黒いヘビのこと。

（いったい、あれは何だったんだろう？）

ユウヤのことも考えた。

頭もいいし、悪いやつじゃないのに、どうして学校に来ないんだろう。果たして学校に来る気はあるんだろうか。ユウヤのお母さんは、そのことをどう思っているんだろう。

いろんなことを考えすぎて、頭の中がぐるぐるした。考えても分からないことばかりだ。分かったことといえば、おぼけ池にメダカやフナがいたことだけだ。でも、それだけでも、誰も知らない発見だ。

僕は、濃密な一日に疲れ果て、そのまま眠ってしまった。

「ヒロキ、ベッドで寝ようぜ」

そういって、僕を起こしたのはユウヤだった。時計を見ると、もう午前0時だった。僕は二時間も寝てしまったことになる。うす暗い部屋に、デスクライトだけがこうこうと灯っていた。

「ずっと。本を読んでいたのか？」

「まあな。そんなことより、大発見」

「大発見…？」まだ、しっかりと目が覚めていなかった。

「ヒロキの見た黒いへびの正体だよ。あれは、きつとウナギだ」

「ウナギって、海の魚じゃないの？ それに、生きたウナギはウナギ屋さんで見たけど、あんなに大きくなかったぞ。僕のは腕より太かったんだぜ、こーんなに、でかかったんだ」

両手を広げる僕に、ユウヤが凶鑑を差しだした。

「ここ、見てよ」

ウナギ。へびのように体を横にくねらせて推進力を得るため遊泳速度は遅い。池から川、汽水域まで、どこにでも生息。嗅覚はイヌに匹敵するほど優れており、甲殻類や魚を丸呑みする。

一般的に淡水魚として知られているが、海で産卵・孵化を行い、淡水にさかのぼってくる。産卵地は日本から2000kmも離れたマリアナ諸島沖、幼魚は日本まで旅をして川を上る。成熟するのに10年、寿命は産卵をしなければ80年といわれるが、詳しいことは判明していない。体長は100cmを超える。

ユウヤの指は、最後の一行を差ししていた。

「体長は百センチを超える…」

「どうよ、おばけ池にアナコンダがすんでいるっていうより、うんとリアリティがあるでしょ」

「だけどさ、ウナギって、本当に一メートルにもなるのか？」

「うな井になる五十センチくらいのは、まだまだ、子どもだったみたいだな。僕もあれが大人だと思っ
てたよ」

「うーん。まだ信じられねーや」

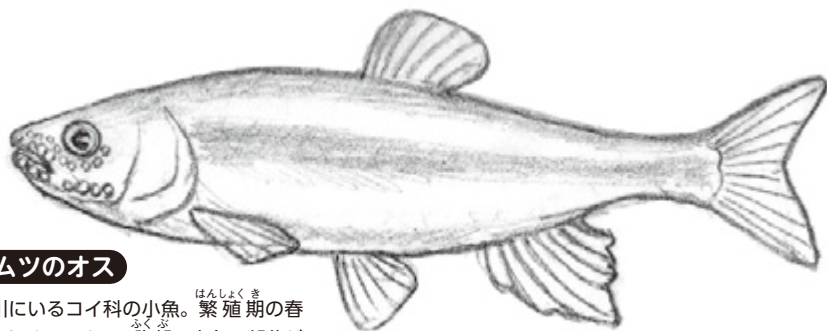
「だからさ、確かめようよ、二人で」

「確かめるって？」

「もちろん、つかまえるんだよ」

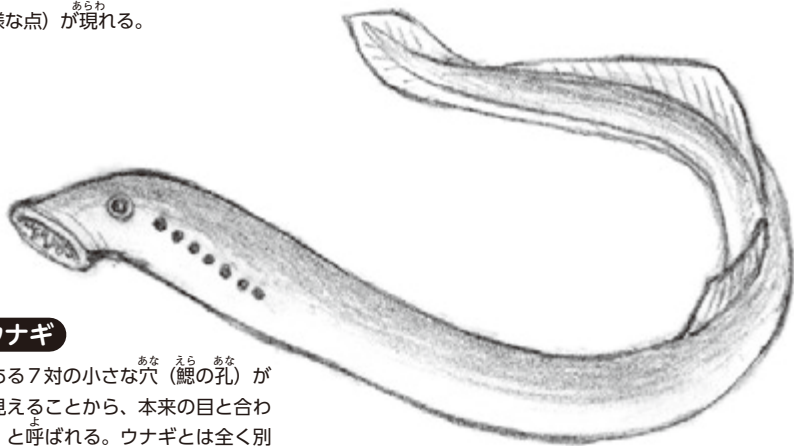
ユウヤのこの提案を、断る理由はどこにもなかった。

僕たちはベットに横になり、大ウナギ捕獲への夢をふくらませた。明日は土曜日で学校は休みだ。あと一週間もすれば、夏休みになる。



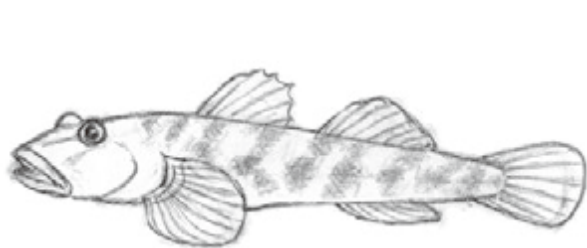
カワムツのオス

身近な川にいるコイ科の小魚。繁殖期の春から夏にかけて、オスは腹部の赤色の部分が広がり、顔は赤黒くなり、口や目の周辺に追星（イボの様な点）が現れる。



ヤツメウナギ

目の後ろにある7対の小さな穴（鰓の孔）が目のように見えることから、本来の目と合わせて「八目」と呼ばれる。ウナギとは全く別の種類で、生きている化石といわれる。



ヨシノボリ

ハゼの仲間の小型の魚で、汽水（海水と川の水が混ざった水）から淡水に生息する。お腹のヒレが吸盤のようになっていて、流れが速い川でも生息している。



ドバミミズ

身近によく見られる細長いミミズより、太くて長い特大サイズのミミズがフトミミズ科のドバミミズで、ウナギやナマズの釣り餌としてよく使われる。ミミズが多いとフカフカの良い土ができる。



ウナギ

物語に登場するのはニホンウナギで、日本には他に全長2mにもなるオオウナギという別の種類のウナギもいる。ウナギは皮膚でも呼吸できるため、雨の日に道に現れて人を驚かせることもある。絶滅危惧種。



ヒナコウモリ

コウモリの仲間は世界に約1000種類、日本には30種以上いる。ほとんどが夜行性で、ユニークな顔をしたものが多い。

カタツムリ

貝の仲間は海や川など水の中だけでなく、陸にも生息する。それを陸貝と呼び、殻があるのはカタツムリ、ないものをナメクジと呼んでいる。



ヤゴ

トンボの幼虫で、種類によって形が違ふ。水の中で折りたたみ式の下あごを一瞬で伸ばし、昆虫やエビ、魚をとらえて食べる。

3 トンネルを抜けたら

夏休みに入ると、僕たちは昼間から大手を振って遊ぶことができた。

「久しぶりだな。こんな風に歩くのは」

ユウヤがまぶしそうに、空を見上げていった。三か月もの間、夜しか出歩かない生活は、さぞかし退屈だったに違いない。僕はユウヤに聞いてみた。

「お前さ、家の中で、毎日、何をしてたんだよ？」

「何してたんだろ？なあ、部屋の中で本を読んだり、映画を見たり…、よく覚えていないや」

「退屈だったろ？」

「それでもないよ。あつ、そうだ。一つだけ分かったことがある」

「何、何？」

「勉強つてさ、学校より、家でやった方がはかどるみたい。教科書はもう、みんなより、ずいぶん進んじやったよ」

何て、かわいげのないやつだ。普通、不登校になんてなったら勉強の遅れを気にするところなのに、こいつは家にいながらも、一人で学校の勉強をしていたに違いない。しかし、そんなところが、ユウヤらしいなと思った。

「さて、行くか」

僕たちは、これから、おばけ池のトンネル探検に行くのだ。

いつものように自動販売機の前であたりを見わたし、まず、持ってきたアミをフェンスの向こうに投げこんだ。昼間、ここへ来るのは初めてなので、いつもより緊張する。車の通りも多いし、フェンスに貼られた『立ち入り禁止』の看板も目立つ。

「よし、今だ！」

僕たちは、車がとぎれた瞬間に、五秒でフェンスを乗り越えた。そして、すばやく草むらに身を隠した。「いいか、トンネルまでは三十メートル。一気に駆けこむぞ」

草むらからトンネルまでは、何一つ、隠れる場所はない。ここは覚悟を決めて、走りきるだけだ。

「行こう！」

駆けだしたユウヤについて、僕も全速力で走った。たった数秒のことだが、人に見られたらすべてが終わる。立ち入り禁止の場所で子どもを見つけたら、大人たちは学校や警察に電話をするに違いない。だから、必死だった。

「ゴール！ 大丈夫か？」

「うん、誰にも見られてないはず」

はあはあと息をきらせながらも、お互いに笑みがこぼれた。

トンネルの中はうす暗かったが、何とか歩いていけるようだった。

「出口が見えないな」

「ま、行けるところまで行ってみよう」

さらさらと流れる水路の脇を、僕たちはゆっくりと歩いた。水路は、コンクリートのマスで、水は三センチほどの深さだった。何の変化もなく、ただ水だけが均一に流れていた。

「これじゃ、魚なんていないな」

ユウヤのつまらなそうな声が、トンネルの中に響きわたった。

下り坂のようなトンネルをさらに進むと、水路はゆるく左にカーブしていた。カーブを進むと、だんだんあたりが暗くなり、振り返ると、もう入り口は見えなくなっていた。

「探検っていうより、こりゃ、きもだめしだな」

「おっ、ヒロキ、心細くなってきたの？」

ユウヤが冷やかすので、僕はやつを追い越していい返した。

「ばーか、俺は夜のおぼけ池で遊ぶ男だぜ。こんなトンネル平気に決まってるだろ」

「あはははっ、確かにね」

でも、分かっていた。僕がおぼけ池に行けたのは、そこにユウヤがいたからだし、このトンネルを進めるのも、隣にユウヤがいるからだ。一人だったら絶対無理。それ以前に、入ろうとも思わない。

そのときだった。僕の前方に黒いかたまりが三つ見えた。かたまりはコンクリートの低い天井にぶら下がっている。

(何だろう?)

このまま行けば頭に当たる。しかし、動きもしないので気にせず歩いていくと…。

「うわあ！」

あまりのおどろきに、僕は後ずさり、後ろにいるユウヤにぶつかった。

「どうした、ヒロキ、どうした？」

「あれ、あれ、あれ！」

黒いかたまりには、みにくい顔があった。

「うわあ、コウモリだあ。すごーい！」

(おいおい、そこは一緒にこわがるところだろ)

僕はしりもちをつきながら、そう突っこみを入れた。しかし、相手はユウヤだからしかたない。危険な生き物も、気持ちの悪い生き物も、何でもかんでも「面白い」というやつなのだ。案の定、ユウヤはいった。

「見て見て、面白いよ。かわいいけど変な顔。それにしても、こいつ、本当に逆立ちして寝るんだな。マンガみたい。へー、爪で止まるんだ。でもさ、こんな平らなコンクリートに、よくつかまれるもんだね。寝相が悪くて落っこちたりしないのかなあ」

興奮するユウヤを見ていたら、何だか笑いがこみ上げてきた。

「よいしょっと。そいつ襲いかかってこないのか？」

「大人しそうだよ」

「血とか吸すわれないか？」

「吸血きゅうけつコウモリは、日本にはいないよ。よく見るイエコウモリより少し大きいから、きつとヒナコウモリだと思う。それにしてもすごいよな、こんなところで、コウモリが寝ねていたなんて大発見だ」

少しこわかったが、僕ぼくもコウモリを観察した。ユウヤのいうように、コウモリは変な顔だった。目は真つ黒で麻あさの実のように小さい。そのくせ耳はメツチャでかい。

「超音波ちゆうおんぱを聞きとるためかなあ？」

「たぶんね。だけどさ、面白いよね。みんな、コウモリが超音波で虫を捕とることは知っているくせに、こんなところで寝ているなんて知らない。凶鑑ずかんには木のうろで寝るって書いてあるからね」

確かにその通りだ。こんな学校の先生だつて知らないはずだ。

ユウヤが静かに指を伸ばして、コウモリの背せなか中をさわった。

「おおっ」

「どうした？」

「ヒロキもさわってごらん、そうすれば分かる」

こんなさわりたいくはなかったが、弱虫と思われのはいやだ。僕おれも恐おそるおそる指を伸ばし、コウモリをさわってみた。

「どう？」

「うわっ、毛が生えている。で、あつたかい」

これはおどろきだった。何だか、ネズミのような感じ。

「やっぱ、さわってみなきゃ、分かんないよな」

それから僕たちは、またトンネルの先を目指した。ユウヤは、コウモリを一匹びき持つて帰るといいだししたが、それは帰りにすればいいと阻止そしした。だって、こんなのを手にしたら、気が散たって探検たんけんどころではなくなってしまう。しばらく歩いたが、トンネルの出口はなかなか見えてこなかった。僕は心配になつていった。

「このトンネル、本当に出口はあるのかなあ」

「入り口があるんだから、出口もあるでしょ。でも、最悪なのは、このトンネルが地下の下水につながっていた場合だね。そしたら、この冒険ぼうけんもおしまい」

ユウヤが、後ろでそう答えた。

実はこのトンネル探検には、意味があった。この前見た巨大生物きょうだいせいぶつが、もしウナギであるのなら、ウナギがどこから来たかが気になった。凶鑑ずかんには、ウナギは海で産まれて川をさかのぼるとあった。

（果たしておぼけ池は、ちゃんと海につながっているのだろうか？）僕たちは、そんな素朴そぼくな疑問ぎもんをいだいたのだ。もし、つながっていなかったら、あのウナギは海に帰ることができないことになる。

しばらく歩くと、トンネルの勾配こうばいがだんだんきつくなった。そして、周りが少しずつ明るくなり、やがて遠くに出口が見えた。

「出口だ！」

僕たちは、だんだん早歩きになった。

「あの向こうはどうなっているんだろう」

自然と駆け足になった。小さかった出口の光が、どんどん大きくなってくる。そして、僕たちは、その光の中に飛びこんだ、

「うひゃあ、まぶしーっ」

そこには、きれいな小川があった。川の向こうには背の高い木が立ち並び、キジバトの鳴き声が響いていた。トンネルを流れてた水は岩盤にぶつかり、岩肌をぬらしながら川へ流れこんでいる。その岩のすぐ向こうには、こじんまりとした淵があった。

「小さな滝つぼみたいだな」

「そうか。大雨のときあふれだした水が、一気にここへ流れでるんだ。だから、ここだけ掘れているんだよ、きつと」

毎度のことながら、ユウヤの分析力には舌を巻く。感心しながら滝つぼの中を見ると、そこにはおどろくほどの魚がいた。

「あつ、魚だ…。すげえ！」

百とか、二百とか、そんな数ではない。数千、数万の小魚が重なりあうように群れていた。川の底には大物もいる。こんな魚を目の当たりにして、じつとしていられるわけがなかった。

「行こう！」

「うん！」

僕たちは、アミを手には岩盤の上から淵の中に飛びこんだ。

ガッポーン。

穏やかだった水面に僕たちの足が突き刺さると、白い水しぶきが高く跳ね上がった。その向こうに、弾けるようなユウヤの笑顔があった。おそらく僕も、あんな顔をしているのだろう。

「ぎゃはははっ」

意味もなく、笑い声を上げていた。

「ん？ ヒロキ、砂の中に足を突っこんでみてよ」

僕はいわれるままに、淵の底のふかふかした砂に足を突っこんだ。

「うはっ、冷たい！」

砂の中に冷たい水を感じた。ユウヤの話では、川には二つの流れがあるという。一つは地上を流れる目に見える流れ、もう一つは、地下を流れる目に見えない流れ。

「伏流水というんだ。ここは川底が掘れているから、伏流水が湧きだしているんだよ」

なるほどなあど納得したが、僕の体は勝手に浅瀬に向かっていった。

飛びこんだと同時に、淵の魚が消えたからだ。浅瀬の草陰に隠れたに違いない。草の奥にアミを置き、上流から足で魚を追いこんだ。

ガサガサガサ。

「よし、入った！」

でっかくて腹の赤い魚だった。体の中央には紺色のラインが一本、ヒレは黄色く見えた。

「おっ、カワムツのオスだ」

「何でオスって分かるの？」

「この色は婚姻色っていつてさ、オスだけに現れるんだ。モテたい男のお化粧なんだ」

「キモツ、男のくせに：」と、いかけて気がついた。「そういえば、鳥も、きれいなのは、ほとんどオスだ：」

「そう、みんな女にモテたいんだよ」

「でもさ、婚姻色のない生き物もあるだろ」

「そういうやつは、セミや、カエルのようにオスだけが鳴いてメスを誘う。他には、イモリやタガメのようにダンスをするやつもいる」

「あはっ、変なの」

「変なことないよ。生き物のオスはみんなモテたくて必死なんだ。僕たちも数年したら、化粧して駅前でダンスを踊ったり、ギターを持って歌ってるかもね。そうだ、二人でバンドでも組もうか？」

「あはははっ、よせやい」

僕は笑ってごまかしたが、本当にユウヤの言葉には、教科書とは違う説得力があると思った。

それから僕たちは、話もせずに、本気で魚を追いかけた。

バケツを持ってこなかったので、岸辺の砂に穴を掘り、石で囲んでいけすを作った。つかまえた魚は、全部いけすに入れた。

つかまえては魚をながめ、またつかまえては魚をながめる。そんなことを繰り返すうちに、時間だけがどんどん経った。

「ユウヤ、俺、発見したぜ」

「ん？ 何を」

「カワムツは草に隠れるけど、ヨシノボリは石に隠れる。魚によって、隠れる場所の好みが違うみたいなんだ」

「おっ、面白い。そんな風に考えたことなかったよ。確かに、そういえばそうだね。じゃ、砂に隠れるのは？」

「そんなのいるのか？」

「よし、やってみよう」

ユウヤの指示で、僕は浅瀬に二つのアミを構えた。アミの上流は砂地で、泳いでいる魚の姿はない。この砂の中からユウヤが魚を追いだし、僕がアミを上げるといいう作戦だ。

「行くぞー」

ユウヤが五メートルほど上流から、足で砂をかき混ぜながら下りてきた。川の流りに砂煙が上がり、

そのにがりがアミの中を通過した。(果たして、砂の中から魚は出てくるのだろうか?) ユウヤの足がアミの前まで来たとき、僕は二つのアミを持ち上げた。

「おっ、何だこれ?」

二つのアミの中には、キラキラした白っぽい魚と、平べったい虫が数匹入っていた。

「すごい、カマツカだ。カマツカは別名スナモグリっていうんだけどさ、本当に砂に潜ってるんだあ。ほら、こいつの背中、砂の色と一緒」確かにカマツカの背中は保護色で、砂と同じ色をしていた。

「もつとすごいのは、こいつだよ」ユウヤが指を差した。

「何これ? 枯れ葉みたいだけど」

「ヤゴだよ」

「えっ、この前のヤゴと、ぜんぜん形が違う」

「この前のはギンヤンマ、こいつはコオニヤンマのヤゴ。まさか、砂の中に潜るなんて、本には書いてなかったぞ。すごいや」

ユウヤは興奮しながら、獲物をいけすに運んでいった。僕はちよつと悔しかった。ユウヤのように生き物の名前や価値を知らないのも、あんな風に興奮ができない。

(やっぱり、図鑑でも読もうかなあ)

そう思いながら、アミを置き、砂の中をガサガサやった。すると、ミミズのように細長い魚が、一匹アミに入った。

(やったあ! ウナギだ)

魚の名前は知らないが、このくねくねした動きは、他の魚とはぜんぜん違うから分かる。僕は、興奮を抑え、ユウヤにいった。

「ひよつとして、これ? ウナギか?」

ユウヤはアミをのぞきこみ、真剣な顔で僕にいった。

「ウナギじゃない。こいつはヤツメウナギだ」

「何だ…」

ちよつと、残念だ。しかし…。

「おいおい、何がっかりしているんだよ。ここじゃ、ヤツメウナギは超絶滅危惧種なんだ。ある意味、ウナギよりも大発見だよ」

「本当か?」

「本当さ。すごいよ、あー、この川は、大発見だらけだ」

どのくらい遊んだらうか。僕たちは疲れ果てて、岩盤の上に座っていた。

「うーん、魚捕りつてやつは難しい」

「何いってるんだよ、いっぱい捕ってたじゃん」

「最初に淵で見た大物は、ほとんど捕れてない」

「へへへっ、ついこの前、ザリガニ二匹で大喜びしていたのに。人間というのは変われば変わるもんだ」

「ふんっ、ばかにすんなよ。向上心があるといってくれ」

ユウヤは、僕の顔を見てニヤニヤと笑った。

「それにしても、ここはどこなんだろうなあ？」

魚捕りに夢中になり、すっかり忘れていたが、それは重要な問題だった。僕はトンネルの横の斜面に登り、森の奥をながめた。木々がじゃまをして、周りは見えない。しかし、一か所だけ、枝の間から黒い屋根瓦が見えた。

「あっ、建物があるぞ。…そうか、分かった。神社だ。ここは稲荷神社の森の奥だよ」

突然、ユウヤが立ち上がり、川の中を上流に向かって歩きだした。僕も斜面を駆け下りて後に続いた。しばらく行くと、コンクリートブロックの壁に川は行く手をはばまれた。壁の高さは十メートルもあるだろう。川はそこで、不自然に断ちきれていた。

「ほら、上を見てよ。道だ、ガードレールがある」

「ということは…、分かった！」

僕たちの位置が、神社と道路との位置関係でつながった。

「そうか、一里川だ！」

おぼけ池と一里川がつながった。

一里川というのは、その名の通りたった四キロの短い川で、下流は、仁の川という一級河川にそそいでいる。一里川の源流は稲荷神社の奥の湧き水というのが、学校で習った僕たちの常識だった。しかし、

実際はそうではなかったようだ。

昔、おぼけ池から流れでた水は、団地の丘をぐるりと回ってここに流れていたのだろう。しかし、そこが埋め立てられて広い道路になった。そこで、おぼけ池からあふれる水を流すトンネルを作ったというわけだ。

「こりゃ、川のバイパス手術だな」

ユウヤが大人びた顔でそういった。

「だけど、これで、おぼけ池と海とがつながったぜ」

「うん、一里川が四キロ、仁の川が海まで十五キロ。合わせて二十キロで海まで行ける」

「二十キロって、遠いのか？」

「自転車で、一時間ちよいかな」

「なあ、今度、海まで冒険に行かない？」

「いいね、いいね。それより、帰りは神社の方から行ってみようよ。どこに出るのか見てみたい」

それは僕も考えていたことだ。僕たちは滝つぼに戻り、そこから川を下流に下った。

結局、川の両岸は木や草で覆われ、どこからも上がることはできなかった。要するに川に近づく道がないのだ。しかし、この事実は僕たちにとって、嬉しいことだった。

「滝つぼのことは、誰も知らないね」

「うん、川の中を歩く変わり者は、いないからな」

僕たちは、ここを夜のおぼけ池に続く『秘密の遊び場』に決めた。そして、神社の前にある洗い場から岸が上がった。それから、石の階段を上がり、大きな鳥居の横を通り、一里川にかかる小さな橋をわたった。目の前には広がる田んぼと、大きな道路につながる砂利道があった。僕たちはこの砂利道をふざけながら歩いた。

このあたりに田んぼがあることは知っていたが、こんな風に歩いたことはなかった。いつも車の中から見ていただけだ。ユウヤが意味もなく駆けだしたので、つられて僕も追いかけた。そして、広い道路に出ると、僕たちは並んで歩いた。前方には、僕たちの住むみどり丘の丘の広い丘があった。坂の入り口で、ユウヤがガードレールの向こうを見ていった。

「ここだよ、この奥が秘密の滝つぼ」

「へへっ、昔はこの道路の下に、川があったんだなあ」

僕は、父が子どものころ遊んだという川の上を、ユウヤと二人で歩いた。

4 一匹は生きられない

それから二週間、僕たちは毎日のように会い、何度も一里川の滝つぼへ出かけた。おぼけ池からのトンネルルートは使わず、少し遠回りでも道路を使った。こそこそと人目を避けていくスリルも捨てがた

かったが、大ウナギを釣るまではリスクは避けたかった。

今日は朝から、どしゃぶりの雨。

予定を変更し、僕の部屋で作戦会議となった。ユウヤが、棚の水槽をながめていった。

「へえ、水槽が三つもあるんだ」

「百均の水槽だけだな」

「これはクワガタで、これはザリガニ、ん、これは？」

「魚水槽なんだけど、昨日全部死んだ」

「全部？」

「水槽が小さいから、一匹死ぬと水が腐って全部死ぬんだ。もう、臭くってまいったよ。それ以上に、母さんがうるさくって」

「ま、それはしかたない。……おっ、ヒロキも図鑑を読んでるんだ」

ユウヤが、机の上の淡水魚図鑑を見つけた。

「何でもかんでも、ユウヤに聞いてばかりだからな。でもさ、面白いんだ。分厚くて読む気にもなれなかったんだけど、つかまえた魚のページは頭に入る」

「あはははっ、そんなもんだよ。僕だって図鑑を広げるのは答えあわせのようなものさ」

「答えあわせ？」

「前にもいったろ、知識より体験だって。それよりさ、大ウナギ釣りの計画をそろそろちゃんと立てな

いと」

「うん」

これまでも僕たちは、ウナギ釣りの話を何度もしてきた。どんなエサがいいとか、どんな仕掛けがいいとか、釣り上げたらどうするかとか。そんなことを想像するのは、時間を忘れるほど楽しかった。しかし、計画はいつこうに進まなかった。

何しろ、僕もユウヤも、釣りの経験がほとんどない。おまけに、大ウナギがおぼけ池のどこに潜んでいるのかも分らないのだ。何とか攻略の糸口をつかもうと、夜のおぼけ池にも行った。しかし、あの日見た大ウナギの姿を確認することはできなかった。

(果たして、僕が目撃したのは、本当にウナギだったんだろうか?)

そんな気持ちにすらなってくる。

「本当に、大ウナギなんているのかなあ?」

「おいおい、唯一の目撃者が、弱音を吐いてどうするの」

「だって、ぜんぜん見つからないじゃん」

「そりゃ、ウナギだって、見つからないように隠れてるんだよ」

かなりのお手上げ状態だったが、ユウヤが僕だけが見たウナギを『いる』と信じてくれていることだけが救いだった。

トン、トン、トン。

階段を上る足音が聞こえ、父さんが部屋に入ってきた。

「よっ、スイカ、食うか?」

「ありがとうございます」

ユウヤが緊張気味にお礼をいうと、父さんはスイカをのせたお盆をテーブルに置き、そのままどかと床に座った。

「ええっ、父さんもここで食べるの?」

「いいじゃん、楽しそうだし。なあ」

ユウヤが、ぺこりと頭を下げた。

「ごめんな、うちの父さん、空気が読めなくて」

僕がそういうと、ユウヤが答えた。

「大丈夫、僕も空気が読めないから」

しまったと思った。ユウヤが不登校になる前、クラスの仲間はユウヤのことを、空気が読めないやつと呼んでいたのだ。僕はそれを口にはしていないが、心の中では同じように思っていた。同罪だと思う。僕が黙っていると、父さんが話した。

「だいたいだな、『空気を読め』だなんて誰がいいだしたんだ。そんなのはいつも、多数派の暴力だ。いちいち空気を読んでたら、自分の意見なんていえないよなあ。そんなこというやつらは、一生、いいたいこともいわず、やりたいこともやらず、びくびくしてればいい」

父さんの言葉は、僕の胸に突き刺さった。

「俺にいつてる？」

「ううん。だって、お前は今、好きなことやっただろ」

ドキツとした。そして、ユウヤのお母さんのいった「親をなめないですよ」という言葉を思いだした。

（父さんは、ここ最近の僕の行動に、何かを感じているのだろうか？ ひよつとして、作戦がばれた？）

ユウヤが、話題を変えるように父さんにいった。

「あっ、そうだ」

「何だ？」

「おじさんは子どものころ、おばけ池や一里川で遊んだんだよねえ」

「うん、遊んだよ」

「そのころウナギって、いましたか？」

「ああ、けっこういたなあ。子どもにや、なかなか捕れない魚だけど、鉛筆みたいな細いやつは、うじゃうじゃいたよ」

「うじゃうじゃ？」

「ああ、夏になると堰の下に真っ黒になって固まっていたよ。山ほどつかまえて小学校のニワトリに食わしたくらいだ。ここは海が近いからなあ」

初めて聞く話だった。僕は、身を乗りだして聞いた。

「近いつて、海まで二十キロもあるよ」

「ウナギはすごいんだよ。あいつら、寿命は長いし、生命力は強いからな。川なんて五十キロでも、百キロでも平気で上るさ。それが証拠に、日本中、河口から山の上のため池まで、どこにでもいるだろ。本当にあいつらは強い魚だ」

「強いつて、ウナギは絶滅危惧種だろ」

「それとこれとは話が別だ。弱いから絶滅しかけてるわけじゃない。まあ聞けよ。俺が子どものころ、家で飼って長生きしたのは、ウナギと、フナと、メダカだぞ。ウナギはエサもやらないのに、水槽で半年以上平気だったし」

「マジ？」

「マジ。メダカなんかさ、外に置きっぱなしのおけの中で五年も生きてた。後で気がついたんだけどな、メダカの寿命は一年らしい。どうやら、おけの中で卵を産んで世代交代してたみたいだ」

「飼ってて、気がつかなかったのかよ？」

「ばーか、つかまえるのが子どもの仕事だ。観察なんてするかよ。でも、おけの中で増えるなんて強い魚だろ」

「すごい！」と、ユウヤがいった。

「ん？」

「おじさんの話、面白い。図鑑に書いてあることより百倍面白い」

父さんは、普段、誰からも褒められたことなどないので、かなり動揺した様子だった。

「まあ、ウナギにエサやらないなんて、図鑑には書けないよな」

「そうじゃなくてさ、ウナギは海に下るとき、自ら断食するんだって。普通の魚はエサを食べないと衰弱するんだけど、ウナギは食べないことで筋肉に脂をため、生殖巣が成熟するんだって」

「図鑑に書いてあったのか？」

「うん。でも、おじさんはさ、図鑑なんか見なくても、ウナギが断食できることを知ってたんだ」

「ま、まあな…」

たぶん父さんは、ユウヤのいつていることが半分も理解できていないはずだ。しかし、褒められていることだけは感じたようだ。

「で、おじさん。大きなウナギって、どうやって捕るの？」

「まあ、竹筒のわなをしかけたり、釣りをしたりするんだらうけどなあ。簡単なのは、穴釣りかな」

「穴釣り？」

「ウナギには、決まったねぐらがあるんだよ。それは、石の下だったり、アシの根もとだったり、泥の中だったりするんだけどな。あいつらが特に好きなのが、石垣の穴」

石垣と聞いて、僕とユウヤは目を合わせた。おぼけ池には、石垣がある。確か、穴もあいていた。

「どんな穴がいいの？」

「そいつは、勘だな。ウナギの出入りしそうな穴を想像するんだ。大きすぎてもだめ、小さすぎてもだ

め。まあ、ウナギの気持ちになって考えるんだな。そうそう、運がいいとな、穴の入り口にザリガニの殻が落ちていることがある。こんな穴は、要注意だ」

「それって、まさか…」

「ああ、ザリガニはウナギの大好物だからな。ほかに、アユだろ、ドバミミズだろ、小魚でも何でも食うな」

「で、釣り方は？」

「そいつは、簡単だ。針に太い糸をつけてさ…。あつ、ヒロキ、針とタコ糸持つてるか？」

「うん」

僕は、引き出しからタコ糸を出し、棚の上のタックルボックスを父さんにわたした。父さんはタックルボックスの中から、ワーム用の大きな針を取りだし、タコ糸を結んだ。

「こんな大きな針でいいの？」

「ウナギは口がでかいからな。それと、力が強い。だから、折れないことが重要だ…。よし、できた」

それは、タコ糸に針を結んだだけの単純な仕掛けだった。

「そんなんでいいの？」

「道具は、単純な方がいい」

僕は、少しおどろいた。いつも役に立たない話ばかりする父さんが、こんなに頼りになるとは。いったいどうなってしまったのだ。しかし、考えてみれば父さんはいつもと同じで、変わったのは僕の方だっ

た。父さんの昔話を、こんなに真面目に聞いたことはなかった。父さんは、僕たちの目を見ながら確かめるように話を続けた。

「いいか、この針にエサをつけるだろ。で、そのエサつきの針を、竹の棒の先にチョイと刺すんだ。で、そのまま、竹と糸を片手でにぎり、エサをウナギの穴に入れるだけだ。そうすると…」

「そうすると？」

「ゴゴゴゴゴンッて、アタリが来る。そしたら…、ゆっくり竹の棒だけを抜き取り…、タコ糸をぐるぐると手に巻いてにぎりしめ…、あとは一気に引つ張りだすだけ。このとき、躊躇してはだめだぞ。ウナギが穴の中で丸まったら、絶対に出てこないからな。とにかく力いっぱい引くんだけ。ぐぐぐぐぐぐつてな」

僕たちは、父さんの話に引きこまれていた。ユウヤが聞いた。

「おじさん、釣ったことあるの？」

「ああ、四、五匹だけだな。でも、あのドキドキ感と手の感触は、今でも忘れていないぞ。大きいもので、六十センチはあったかなあ。すぐ、蒲焼きにして食っちゃまった。うまかったなあ」

「どおりで…」

「うん？」

「どおりで、話にリアリティがあると思った。ところで、おじさん」

「何だ？」

「おじさんはどこで釣ったの、そのウナギ？」

「そこのおぼけ池だよ」

「えっ…」

僕たちは絶句した。

「昔は湧き水もあったし、石垣もあったし、いいとこだったなあ。今じゃ、コンクリートで固めちまったから、ウナギもいないだろ」

のどまで言葉が出なかった。

(石垣は昔のままコンクリートの下に隠れている。ウナギは巨大になって、まだあの池にすんでいる) そう伝えたかったが、まだ打ち明けることはできない。

ユウヤが、身を乗りだして父さんに聞いた。

「おじさんは、石垣のどこで釣ったの？」

「聞きたい？」

「うん、聞きたい」

何とも父さんは嬉しそうだった。

「しょうがねーなあ。教えちゃうか…。誰も知らないだろうが、あのおぼけ池には、二つの湧き水があるんだよ。一つは池の中央、もう一つは北側の斜面。つまりは北側の石垣の奥。だからな、昔は、ウナギを釣るなら北の石垣って決めていた」

「父さん。何で、湧き水があるといいの？」

「湧き水はさ、一年中同じ温度なんだ。だから、夏は冷たく、冬は暖かく感じる。お前も住むんなら、冷暖房完備の部屋がいいだろ」

(なるほどなあと思った)

「俺が釣ったのは、北の石垣の真ん中あたり。一つ石垣が崩れていてな、その左右に手ごろな穴があったんだ」

「おじさん、昔のこと、よく覚えてるね」

「それだけウナギが釣れたのが、嬉しかったんだらうなあ。学校の勉強や先生の名前は忘れても、こいつは忘れられないな」

「分かる、分かる」

僕たちが大笑いをしていると、母さんがやってきた。

「ユウヤくん、こんにちは」

「おじゃまします」

「いつも、ありがとうね。この前は、泊めてもらっちゃって。お母さんにもよろしくいってよ」

「はい」

母さんは優しい顔でユウヤにそういうと、顔つきを変えて父さんにいった。

「あんた、いつまでおじゃましてんのよ」

「いや、二人に大事な話を聞かせてやってたんだ」

「何いってんの。どうせ与太話なんだから。さ、行くよ」

「はい、はい」

「ごめんね、ユウヤくん。本当に空気が読めない人で」

(空気が読めない人……)

ユウヤと僕は笑いだしたくなる気持ちを抑え、菌を食いしばった。そして、我慢して、我慢して、二人が階段を下りたのを確認すると、床に転がって大笑いをした。

意外なるアドバイザーの出現により、僕たちの計画は一気に具体化した。ねらいは石垣の穴、釣り方は穴釣り、エサはドバミミズ。

昔、父さんが釣ったというやり方と同じだ。でも、それはそれで面白いと思った。

決行日は『雨が上がったらすぐに』と、いうことになった。早く釣りたいのが一番の理由だが、お盆の前に釣り上げたいと思っていた。みどりが丘団地では、お盆の三日間、盆踊り大会が盛大に行われる。そのために夜の人通りが多くなるのだ。この間は釣りができないので、雨さえ上がれば今晚でもと、僕たちは考えていた。

家を出た僕たちは、おばけ池を見下ろしながらいった。

「さすがに今日は、無理かな」

手にしたビニール傘がバラバラと雨音を立てていた。これから二人で、丘の上の公園にドバミミズを掘りにいくのだ。ミミズなど掘ったことはなかったが、何度か公園で見かけたことがある。でも、正直な話、ミミズ掘りなんてかっこ悪いし、人に見られたくはない。第一、人に「何してるの？」とたずねられたら、何と答えればいいのか？ しかし、運のいいことに、公園には誰もいなかった。

「俺が前に見たのは、あの木の下だ」
そういつて、砂場の横を通り過ぎようとしたら、ユウヤがいった。

「あつ、いた」

花壇の横の歩道を、ミミズがはっていた。

「でかつ、二十センチはあるね。あつ、あつちにもいる」

「おつ、こつちにも」

ミミズは難なく採れた。ユウヤはそれを指でつまみ、ヨーグルトの容器に入れた。僕はさわりたくなかったので、小枝を割り箸のように使つてミミズを採った。

「雨の日は、ミミズも地上へ出るんだな」

「雨が好きなのかなあ？ それより、ヒロキ、これ気持ち悪いよ」

ユウヤがヨーグルトの容器をのぞきながらいった。見てみると、容器の中では十四ほどのドバミミズが団子になっていた。しかも、そのうちの三匹が、器用に容器からはいだそうとしている。

「ゲツ、キモツ！ ふたがないと出ちゃうぞ」

「いいよ、土を入れとけば」

ユウヤが花壇の土を容器に入れると、ミミズは落ち着いた様子で、はいだそうとはしなくなった。

あつという間にミミズが採れてしまったので、僕たちは公園をぶらぶらと歩いた。ユウヤがベンチの上でカタツムリを見つけた。

「あつ、カタツムリだ。不思議だよなあ。カタツムリもミミズも、脚がないのに、何でこんなに上手に歩けるんだろう」

ちよつと、悔しかった。

(同じように歩いているのに、何でユウヤの方が、いつも先に生き物を発見するのだろうか。よし、僕だつて…)

そして、僕は、すべり台の下で奇妙なものを発見した。

僕の見つけたのは、巨大なカタツムリだった。よく見ると、殻が二つある。(新種か?) じっくり観察してみると、これは殻が二つあるのではなく、二匹の大きなカタツムリがからみあっているのだと分かった。二匹はねつとりとした体をからませ、ゆつくりと苦しそうに動いている。

「ユウヤ、大変だ。カタツムリが共食いしてる」

ユウヤが、血相を変えて飛んできた。

「わあ、すごい！ こんな初めて見た」

ユウヤのおどろく顔を見て、嬉しくなった。僕は自慢げにいった。

「やっぱり、共食いだろ？」

「共食いじゃないんだけどね、これ、交尾だよ」
ちよつと複雑な心境だが、大発見は大発見だ。

「じゃ、これ、オスとメスなんだ」

「うーん、ちよつと、ややこしいんだけどさ。実はカタツムリって雌雄同体なんだよ」

「雌雄同体？」

「普通、生き物って、オスとメスとがいるでしょ。でもカタツムリは、一匹の体にオスの機能とメスの機能が両方あるんだよ」

「へー、変なの」

「変だよねえ」

「でもさ、オスの機能とメスの機能をもってるんなら、一匹でも卵は産めるだろ。何で合体？」

「ところがさ、雌雄同体でも、一匹では卵が産めないんだよ」

「何で？」

「何でっていわれても、神さまがそう作ったとしかいえないよ。どんなに便利な体でも、一匹では生きられないということだ」

「ふーん」

納得はできなかったが、面白い話だと思った。どんなに便利な体でも、一人では命をつなげることは

できないのだ。カタツムリは、静かに体をからめあいながら、動き続けた。

気がつけば、雨が上がっていた。西の空はうっすらと青く、夕暮れの陽が差していた。

「行けるぞ、今晚、決行だ」

「うん、今日は釣るまで帰れないね」

僕たちは、容器のミミズを確認し、カタツムリに別れを告げた。

閉じた傘をくるくる回しながら、ユウヤがいった。

「僕はヒロキンちに泊まる。ヒロキは、僕んちに泊まる。そういうことにしておこう」

「OK、母さんには、そういつとくよ…。あつ、虹だ！」

振り返った僕の目に飛びこんできたのは、絵にかいたような虹だった。

5 大ウナギを釣るのだ

蒸し暑い夜になった。

夕食を終えた僕は、釣り針をポケットに忍ばせて、おぼけ池に向かった。濃紺の空に月はなく、星だけがぼんやりと見える。僕は、あせる心を抑えてフェンスを乗り越えた。草に残る雨粒に、街灯の光がキラキラと反射している。かまわず草の中に分け入った。半ズボンもシャツもぬれてしまったが、どうっ

てことはない。

(僕はこれから、大ウナギを釣るのだ)

ユウヤはトンネルの入り口で待っていた。大きな衣装ケースを両手で抱えている。

「何だ、それ？」

「釣れたウナギを入れようと思ってさ」

「えっ、マジで？」

「だって、一メートルもあるんでしょ。これでも、体をしの字に曲げなきゃ入らないよ。それに、こいつはふたつきだから、逃げられる心配がない」

なるほどなあと思った。僕なんか、釣ることばかり考えて、釣った後のことなんて、これっぽっちも考えていなかった。僕はユウヤに聞いてみた。

「釣れたらどうする？ やっぱり、家で飼うのか？」

「あはははっ、そんな大きな水槽はないよ。お風呂の浴槽で飼うっていう手はあるけどね」

「マジ？」

「冗談だよ。最終的には逃がしてやるっていう手もあるけどな、すぐに逃がすのはもったいなさすぎる」
確かにその通りだ。もしあのウナギが釣れたら、これはもう一大ニュースだ。新聞にのるかもしれないし、テレビ局が来るかもしれない。それ以前に、僕たちは学校で大注目をあびることになる。

「学校へ持っていったら、スターだな」

「いいの？」

「何が？」

「そんなことしたら、僕と遊んでいることばれちゃうよ」

「そんなの、かまわないよ」

「でも、立ち入り禁止のおぼけ池で遊んでいたことまで、先生にばれちゃうな」

そいつは、ちよつと困る。先生に叱られる覚悟などできてはいるが、『二度とここで遊ばない』なんて、約束させられるのはいやだ。

「ユウヤはどうしたいんだ？」

「僕は、釣れればいい。とにかく、その巨大なウナギをよく見てみたいんだ。その後は飼ってもいいし、食べてもいいし、逃がしてもいい。だって、あいつは、海に帰りたいのかもしれないし。まあ、どっちにしても、どうするかは釣った後に、釣った方が決めることにしよう」

「うん、そうだな。よし、勝負だ！」

「いいね、いいね。勝負だ、勝負！」

僕は、ポケットから仕掛けを取りだし、その一つをユウヤにわたした。ユウヤは仕掛けをくるくるつと解き、ヨーグルトの容器から太いドバミミズを取り出した。

(ううっ、これをつけるのか：)

僕はびびったが、ユウヤは気にもせず、ミミズに釣り針をブスッと刺した。そのとたん、ミミズは大

暴れをした。さらに体からは変な汁が飛び出した。

「うひゃあ、指がねばねばになっちゃったあ。うへへへ」

笑いごとではない。気持ちが悪すぎる。

しかし、釣りとはこういうものなのだ。ユウヤも、お父さんも、こうしてミミズを針に刺したのだ。やらなくてどうする。できなさや、ウナギは釣れないぞ。いやがる気持ちを、無理やり理屈で封じこめた。そして覚悟を決めると、ミミズの団子に指を突っこみ、逃げようとする

ミミズを指先でつかんだ。ミミズはじたばたと暴れた。やはり、変な汁が出た。ひゃあっと声を上げ、投げ捨てたい心境だった。しかし、自分でやらなければ。これは勝負なのだ。

「ふうっ」

どうにかミミズに針を刺すことができた。ほっとして、全身から力が抜けるようだった。

「やったね」

ユウヤが後ろで、嬉しそうに笑った。

それから僕たちは、おばけ池の北側に移動して、ウナギの穴を探すことにした。ユウヤが声をひそめていった。

「いいか、ウナギは僕たちの足もとに隠れているんだ。だから、静かに歩くこと。あと、大声も立てないように」

「分かった。何だか、ドキドキするぜ」

「うん、慎重に探そう」

僕は左の端から、ユウヤは右の端から、それぞれ真ん中に向かって歩くことにした。北面の真ん中には、父さんのいうウナギの穴があるはずだ。

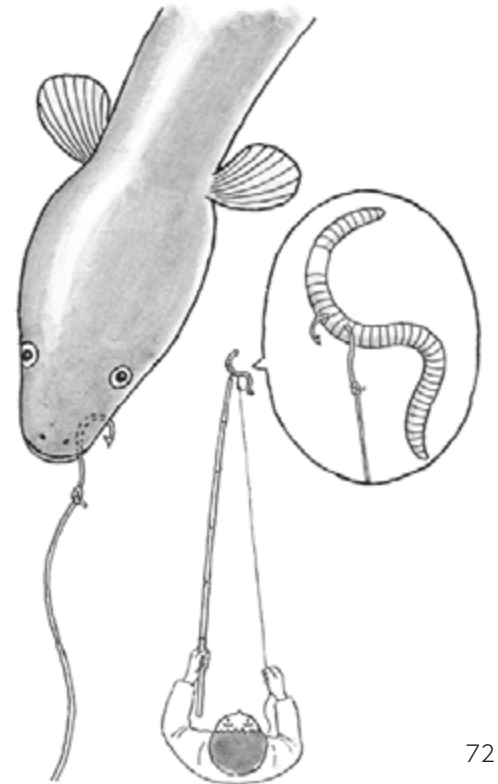
懐中電灯で水中にある石垣を照らしながら、僕はゆっくりと歩いた。しばらく行くと、石垣の石と石のすきまに、手ごろな穴があいているのが見えた。小さなエビが入り込んでいる。しかし…。

(こんな穴ではだめだ)

何しろ相手は大ウナギだ。牛乳ビンが入るほど大きくなければ、あいつは出入りできない。この穴は、見送ることにした。普通サイズのウナギなら釣れるかもしれないが、へたに音を立てて大ウナギに警戒されてはいけない。大きな穴だけをねらうことにしよう決めていたのだ。また一つ、また一つと穴があった。しかし、どれも大ウナギが入れるほどの穴ではなかった。

「おい…、ヒロキ…」

小さな声でユウヤが呼んだ。僕は仕掛けを足もとに置き、ユウヤのところへ向かった。足音を立てぬ



よう、静かに歩いた。

「どうした？」

「この穴、見てよ」

僕は、ユウヤが照らす懐中電灯の光を目で追った。

「あっ…」

「いるだろ」

ウナギだった。大ウナギではなかったが、石の穴からウナギが頭を出していた。細い鼻先とふつくらとした頬、これはウナギのシルエットだ。図鑑で何度も何度も見たのだから間違いない。

「すごい、本当にいるんだ。どうする、釣る？」

「ううん、ねらいは大ウナギだからね。でも、ちょっとだけいたずらしてみようか」

ユウヤはそういつて、ミミズを一本手に取った。そして、ミミズを穴の真上から、そっと水面に落とした。

ミミズはくねくねと動きながら、池の底へと落ちていった。その様子は、懐中電灯の光の帯がしつかりととらえていた。僕たちは息を殺して、ミミズの行方を目で追った。やがて、ミミズは穴から顔を出すウナギの鼻先まで落ちていった…。

一瞬の出来事だった。

『ガッ』と、ウナギの口がミミズを捕らえた。ウナギの口は大きく、十五センチもあるミミズの半分が

口の中に消えた。そしてウナギは、口からはみだした半分を『ガッ、ガッ、ガッ』と首を振りながら、三口で、すべて飲みこんでしまった。

「……」

あまりにもリアルなウナギの行動に、僕は言葉をなくした。

「これだ、おじさんのいつてた『ゴン、ゴン、ゴン』っていうアタリは、このことだ…あつ、ごめん。大声出しちゃった」

ユウヤにしては珍しく興奮しているようだった。

ウナギがここにいることは分かった。ミミズを一発で食べることも分かった。あとは大ウナギを釣るだけだ。僕たちは再びしきり直し、大きな穴を探すことにした。

しかし、大ウナギが入りできそうな穴は、簡単には見つからなかった。

「どう？」

「だめだ、大きな穴はない」

結局、左右に分かれた僕たちの距離はどんどんと縮まり、とうとう北面の中央まで来てしまった。そして、僕はそこに崩れた石垣を見つけた。

「あっ、これだ。父さんのいつていたやつ」

石垣の四角い石の一つが、ごろんと池の底に落ちていた。石は一辺が三十センチもある。ユウヤが、その石の収まっていた場所を懐中電灯で照らした。

「あるよ、大きな穴がある」

大きな穴の周りは石垣が崩れ、あやしい穴が三つ、四つ開いていた。心臓が、どくん、どくと音を立てた。もし、やつがいるならここしかない。

「やるか！」

「うん」

僕たちは、仕掛けのついた竹の棒をつまむように持ち、膝について池をのぞいた。懐中電灯で穴を照らしながら、棒の先のミミズを穴に差し入れる。ウナギがいれば、ここでゴンゴンとアタリが来るはずだ。

「……」

しかし、穴の中からは、何の反応もなかった。横目でユウヤを見ると、ユウヤも首を振り、反応はないと伝えてきた。

（じゃあ、次の穴だ）

そのまま移動し、次の穴へ…。そのときだった。

「来たっ！」

慌てて頭を上げると、ユウヤの手先が揺れていた。

ゴン、ゴン。

離れていても、竹の棒が動いているのが分かる。ウナギがエサを食っているのだ。ユウヤは緊張した

顔で竹の棒を抜き、右手の甲にタコ糸を巻きつけた。

「くわえてる？」

「うん、くわえてる。ヒロキ、両手で引つ張るから、灯りを頼む」

ユウヤはゆつくりと息を整えると、腕を真っ直ぐに伸ばした。糸がぴんと張り、ユウヤの手がさらにゴン、ゴンと動いた。

（もうウナギは、針を飲みこんでいるはずだ）

ユウヤは、一気に糸を引つ張った。

「おおおっ」

穴からウナギの頭がぬっと出た。大きさは、僕のゲンコツほどだ。釣られまいと、左右に首を振っている。

「うわあ、でかい」

さらにユウヤが引つ張ると、ウナギは四十センチほど胴体をさらした。どう見ても、僕の腕より太かった。

「だめだ、抜けない！ 引きもどされる」

ユウヤにしては珍しく、動揺した声だった。

「抜けないって…」

「こいつ、重いし、力が強すぎる。くそー、穴に潜られたらおしまいだ。無理やり引くしかないのかあ…」

ユウヤと大ウナギのつな引きは続いた。おそらくウナギは、横穴に対して真上に引き上げられているので、長い体を曲げて踏ん張っているのだ。石垣の穴からは、泥煙がもくもくと出ていた。僕は、どうしていいのかわからず、ただただ、ユウヤの姿を見守った。

「うううっ、くうううっ…」

ウナギが、少しずつ穴に入っていく。

「大丈夫か？」

「ちくしょう、まっすぐ向こうに引けば抜けるのに、腕の長さが足りない」

ウナギとは、こんなに力が強いものなのか。

ぐぐっ、ぐぐつとウナギが後ずさり、ついにユウヤが音を上げた。

「ごめん、もうあきらめる…」

その言葉を聞いて、僕の体が反射的に動いた。

「ユウヤ、貸して！」

僕は、一直線に伸びた糸をからめるようにして持つと、糸を張ったまま池に飛びこんだ。そして、力をこめて糸を引いた。

ぐぐんっ、ぐぐんっ、ウナギの抵抗が手に伝わる。

「大丈夫、まだ体は出てる」

懐中電灯を持ったユウヤの声がした。

（よし！）

腕の力に限界を感じた僕は、糸を持った手を腰に抱え、一歩ずつ後ずさりをした。ぐぐんっ、ぐぐんっ。

「出た、出た。いいぞ、いいぞ。ヒロキ、ウナギが出てきた」

もう少し、もう少し。

「ヒロキ、あとちょっとだ」

次の瞬間、ズルンツという感触が手に伝わり、糸が軽くなった。

（やったー）

ついに僕たちは、大ウナギを穴から引きずり出したのだ。

それからもウナギは大暴れを続けたが、穴に潜られなければ大丈夫だった。しばらくすると、疲れ果てたのかウナギの動きが鈍くなった。そこで僕たちは、ウナギを衣装ケースに押しこんだ。

「うわっ、でかい！ でかすぎる」

「こらっ、大人しくしろ！」

気がつけば、ユウヤも池の中だった。衣装ケースに僕がウナギを入れるたび、すばやくふたをするのだが、ウナギは器用に尻尾からはい出してしまふのだ。

「もう一回！」

「よし、はいった！」

ケースのふたがしつかりと閉じられた。これでもう、僕たちの完全勝利だった。しばらくウナギは、ゴンゴンとケースに頭をぶつけて暴れていたが、やがて観念したのか動かなくなった。

僕たちを見下ろす空は、紺から黒へと色を変えていた。その分、星は輝きを増し、街灯には相変わらぬ光が飛んでいた。おぼけ池は、再び静寂を取りもどしていた。

僕たちは、トンネルの入り口に腰を下ろし、ぐったりとしていた。弾けるような興奮も、震えるような感動も、ついさっきのことなのに、過ぎ去ったことのように思えた。

「釣っちゃったんだよなあ……」

「うん、釣っちゃったんだ……」

二人とも、魂が抜けたようだった。あまりにも大それたことをしでかすと、素直に喜べないものなのかもしれない。

「それにしても、ユウヤはすげえや。本当に大ウナギを釣っちゃうんだからな」

「何いってんだよ。ヒロキが池に飛びこんでくれなかったら、ウナギはまだ穴の中だ。あいつは、二人で釣ったんだよ」

「そうかなあ」

素晴らしいながらも、素直に喜べた。釣りを始めるとき、僕たちは『勝負』を口にしたが、これは二人の勝負ではなく、ウナギと僕たちの勝負だった。僕たちは、それに勝ったのだ。

衣装ケースに透けるウナギの影を見て、ユウヤがむふふと笑った。

「ねえ、もう一回、見てみない？」

「いいね、いいね」

僕たちは、衣装ケースに歩み寄り、静かにふたを開けた。ウナギはケースの中で体をしの字に曲げ、大きく息をしていた。

はふっ、はふっ。

息をするたび、ウナギのエラがふくらんだ。ユウヤは手を広げると、ウナギの上に当て、その長さを測った。

「一、二、三、四……。八十五センチってところだな」

一メートルには足らなかったが、十分な迫力があつた。

「それにしても太いよなあ」

「どおりで、重かったわけだよ」

それから僕たちは、そつとウナギをなでてみた。

「ううっ、ぬるぬるしてる」

ウナギがぬるぬるしていることは知っていたが、これほどとは思わなかった。こいつを素手で持つことなど不可能だ。

「うへへっ、気持ちいい」

「すごいよ、この太さ。指が回らない」

しかし、調子に乗ってさわりすぎたのが失敗だった。大ウナギは尻尾の先端をグイッと伸ばし、立ち上がるように脱走を試みた。

「やっべー」

とっさに手を伸ばしたが、ぬるぬるの体はそれをすり抜けた。そしてコンクリートの地面に転がった。

「あつ、こらー！」

ユウヤがウナギに乗りかかるようにして押さえつけた。しかし、力の強いウナギは、ユウヤの体重なともものともせず、ぐいぐいと前に進んでいく。その先には、池があった。

「こらっ、止まれ！」

足で通せんぼしても、ケースのふたで通せんぼしても無駄だった。このままでは逃げられる。僕たちは足でウナギを蹴って、池から遠ざけた。

そのときだった。大ウナギはヘビのように身をくねらせ、いきなり水路の方へ向きを変えた。そして、そのまま……。

「あああ……」

うす暗い堰の上に、一瞬、大ウナギの白い体が横たわった。そして、次の瞬間、大ウナギの姿は闇の中へと消えていった。

ざわざわざわ、ざわざわざわ。

堰を落ちる水の音だけが、とぎれなく続いた。

僕は、がつくりと肩を落とした。そして、どこかにまだ、あいつがいるのではと、懐中電灯で池の中を何度も照らした。しかし、大ウナギの黒い影を見ることは二度となかった。

ユウヤがおぼけ池を見ながら、ひとり言のようにいった。

「まっ、いいか」

「いいかって、いいわけないじゃん。あんなに苦労したんだぜ」

それを聞いて、ユウヤがくすくすと笑った。

「苦労したって？ よくいうよ。少なくとも僕は、楽しいことばかりだったよ」

ユウヤのいうとおりだった。この一か月、おぼけ池に通ったことも、トンネルを探検したことも、ウナギを釣り上げたことも、全部楽しいことばかりだった。気持ちの悪いミミズを針に刺したことも、池に飛び込んだことも、今にして思えば、やはり楽しいことだった。

「いわれてみれば、その通りだな」

ユウヤは、さらにこういった。

「ねえ、ヒロキ。あいつ、どっちに逃げたと思う？」

「どっちって？」

「堰の上か？ それとも下か？ だつてさ、この水路を下ったんなら、海に行けるってことだよ」

確かに、ここにとどまるか、海に向かうかは大きな違いだ。しかし、どちらに落ちたのかは分からない

かった。

「それがさ、よく見えなかったんだよなあ」

ユウヤはしばらく堰を見つめ、ため息をつくようにこういった。

「ま、いいか」

(ま、いいか…) さつきと同じ言葉だった。

「ユウヤ、何でも『ま、いいか』なんだな」

「だってさ、おばけ池に残るか、海へ向かうのかは、あいつが決めることだもん。どっちでもいいよ。それにさ、これで余計な心配がなくなった」

「余計な心配？」

「だって、テレビとか新聞とか、そんな騒ぎになったらめんどくさいじゃん」

釣りをする前には、そんなことも考えてはいたが…。僕は素直な気持ちで答えた。

「そうだな、そんなの、めんどくさいだけだな」

晴れ晴れとした気分だった。

「さあ、帰ろうか」

こうして、僕とユウヤのウナギ釣りは終わった。

せっかく釣った大ウナギには逃げられてしまったが、ウナギなんか、また釣ればいい。このおばけ池は、海につながっているのだから、ウナギはまだまだいるはずだ。

空っぽの衣装ケースを持つユウヤに、僕はいった。

「なあ、ユウヤ。夏休みが終わったら、そろそろ学校へ来ないか？」

「何で？」

「そしたら、もっとお前と遊べるし」

「へへへっ」

「何がおかしいんだよ」

「だって、学校行ってなくても、ずっと遊んでるし。どうせ、明日も遊ぶんだろ」

僕は、心の中で答えた。

(ま、いいか…)

学校へ行くか行かないかなんて、どっちでもいいし、そんなのはユウヤが決めることなのだ。

新学期、こんなうわさを教室で聞いた。

「おばけ池の子どものおばけ、二人に増えたらしいぜ」

おばけがもっと増えればいい。面白いことは足もとに転がっているのだから。

(阿部夏丸)